

令和3年度

I 国 語

(9時00分～9時50分)

注 意

- 問題用紙は、6問で9ページです。
- 解答用紙は問題用紙の中にあります。
- 答えはすべて、解答用紙の所定の欄に、文、文字などで答えるものの他は、ア、イ、…などの符号で記入しなさい。

福島県磐城第一高等学校

令和三年度 I 国語

一 次の各問いに答えなさい。

問1 次の1～3の文の傍線部の漢字の読みがなを、それぞれひらがなで書きなさい。

- 1 二人は互角に試合をした。
- 2 自分で店を営む。
- 3 木の枝が垂れ下がる。

問2 次の1～3の文の傍線部のカタカナを、それぞれ適切な漢字に直して書きなさい。

- 1 結婚式にシヨウタイされる。
- 2 世論を反映したセイサクを立てる。
- 3 転勤のためこの地方にフニンした。

問3 次の行書で書かれた漢字を楷書で書くとき、総画数が同じ漢字を、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

法

- ア 建 イ 桜 ウ 姉 エ 位

問4 「競技会」と同じ組み立ての熟語を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 初対面 イ 造船所 ウ 無条件 エ 衣食住

問5 次の文は、生徒から担任の先生にあてた手紙文の一部である。傍線部の「もらった」を適切な敬語に直して書きなさい。

これから先生からもらったアドバイスを胸に刻んで、努力をしていきたいと思います。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

※剡子（しやうし）は、親のために命を捨てんとしけるほどの、孝行なる人なり。

その故は、父母老いて、ともに両眼をわづらひしほどに、目の薬なると

て、鹿（しか）の乳を望めり。剡子、もとより孝なる者なれば、親の望みをか

なへたく思ひ、すなはち、鹿の皮を着て、あまたむらがりたる鹿の中へ

まぎれ入れば、獵人（あつんど）、これを見て、まことの鹿ぞと心得て、弓にて

射んとしけり。その時、剡子、「これは、まことの鹿にはあらず。わ

れ、親の望みをかなへたく思ひ、いつはりて鹿のかたちとなれる」と、

声をあげて言ひければ、獵人驚いて、その故を問へば、ありすがたを

語る。されば、孝行のこころさし深き故に、矢をのがれて歸りたり。

そもそも、人として、鹿の乳を求むればとて、いかでか得さすべきな

れども、思ひ入りたる孝行の、思ひやられてあはれなり。

(注) ※剡子…人名。

『御伽草子集』による

問1 いつはり を現代仮名遣いで書きなさい。

問2 ① これを見てとあるが、「これ」とは何のことか。五字以上、十字以内で書きなさい。

問3 ② 獵人驚いてとあるが、その理由として最も適当なものを、次のア

イ エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 鹿を射殺そうとしたところ、鹿が思いがけず人の言葉を話したから。

イ 鹿に変装して獵をしていたところ、鹿にたやすく正体を見抜かれたから。

ウ 鹿を射ようと構えたところ、剡子が急に鹿をかばって止めに入ったから。

エ 鹿の様子を隠れて見ていたところ、そばにいた者に突然声をかけられたから。

問4 次の文は、③ 思ひ入りたる孝行の、思ひやられてあはれなりを説明したものである。空欄A・Bに当てはまる言葉を書きなさい。

A が欲しいという両親の望みを剡子がかなえられなかったことは仕方がないけれども、何とかしてかなえようとしたその気持ち

ちはとても B ことだ。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

視線を落とすと、テーブルの上に置かれた父のかさついた右手が目に入った。毎日、毎日、包丁を握り続けた、ごつい手。その手が、もはや老人のそれだと気づいたとき、僕のなかで、⁽¹⁾ヒアイに似た感情が弾けた気がした。そして、ずっと長いあいだ心を締め付けていた紐が、ふいに解かれたような解放感を味わったのだ。

〈1〉

「父さん、俺……」しゃべりはじめた僕の内側には、たしかに^①ある種の恐怖と痛みがあつたけれど、紐が解かれた勢いで言葉は A ころぼれ出していく。

〈2〉

「俺、本当は、東京では、ピエロをやつて……。えっと、ようするに、風船で色んなモノを作るバルーンアートつていうのを仕事にしてるんだ」

〈3〉

父は、表情を少しも動かさないうで、少し首をかしげ、穏やかな目のまま僕を見ていた。

〈4〉

「だ、だから。前に言つてた制作プロダクションの会社には、もう……」結局は最後まで言えず、僕は肺に残っていた空気を熱く息を吐き出した。

〈5〉

暴風でテントの鉄柱がミシッと音をたてた。父はそれを合図にしたみたいに、静かに口を開いた。

「その仕事は、嫌々やってんのか？」

返事に詰まった。嫌ではないけれど、すぐくやりたいことでもない。

だから僕は質問にたいして微妙にズレた返事をしてしまった。

「所詮は、フリーターみたいなもんだし……」

「そうか」

「うん……」

それから、少しの間、二人の口は動かなかった。両音が大きいせいで、沈黙が妙に生々しく感じられた。僕は気持ちの上つ面のあたりがむずむずしてきて、すぐに耐えられなくなった。

「このままずっとピエロつていうのもナンだから、やつぱり俺……」ここで、深くきつちりと空気を吸う必要があつた。「俺……、やつぱり、店を継ごうかな」

父が、僕を見た。強いまなざしではなかった。でも、僕の心臓は、ひとまわり大きくなったんじゃないかと思うくらい、内側から胸を⁽²⁾アツパクして、ドクドクと大袈裟に拍動した。B 最後の審判を受けるみたいな気分だった。ところが……父の顔は氷が解けるみたいに、ゆっくりと⁽³⁾ヤサしい微笑に変わっていったのだ。

「やめとけ」

「え？」

^②心臓をきゅつと握られた。言葉が出てこない。

父は、どこか自嘲気味にフツと笑うと、「食堂の親父つてのは、毎日、下ばかり向いてる仕事だから、肩が凝るぞ」と冗談っぽく言つて、浮かべていた笑みを少し大きくした。

「……………」

父の言葉は、いったいどこまでが本気で、どこまでが冗談なのだろう。僕にはよく分からなかった。

「お前の人生だ。俺に、気を使わなくていい。好きに生きる」

父はいつもの平穏な口調でそう続けた。

でも、口調が平穩なだけに、C それは断定的な響きを帯びて、僕の胸の奥をいつそう重たくした。

(森沢明夫「津軽百年食堂」による。)

問1 文章中の(1)～(3)の傍線部のカタカナを、それぞれ適切な漢字に直して書きなさい。

問2 文章中のAとBとCに入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- | | | | |
|---|---------|-------|-------|
| ア | A すらりと | B かなり | C もはや |
| イ | A だらだらと | B むしろ | C かなり |
| ウ | A とめどなく | B まるで | C もはや |
| エ | A ぼろぼろと | B まるで | C むしろ |

問3 次の文は、本文のどこに入るものか。本文中にある〈1〉～〈5〉の中から最も適切なものを選び、その番号を書きなさい。

「で？」と促しているようにも見える。

問4 ^①ある種の恐怖と痛みとあるが、そのときの僕の心情を二十五字以上、三十字以内で説明しなさい。

問5 ^②心臓をきゅつと握られた。言葉が出てこないとあるが、その理由を説明した文を次に述べる。次の文の空欄を指定された字数以内で書きなさい。

店を継ぐ意志を父に伝え、A二字してもらえることを期待したが、父の返事がB三字で驚いたから。

問6 この文章の心情や表現の説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 父に思いを伝えにくい僕の心情を、会話の文末を言い切らない形で表現している。
- イ 僕の言葉に動揺する父の心情を、父の態度や表情の細かい描写によって表現している。
- ウ 父に対する僕の反発心やいらだつ心情を、巧みな比喻ひゆを用いることで表現している。
- エ 僕の言動に不満をもつ父の心情を、擬態語を効果的に用いることで表現している。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

稲作の発祥地は、佐々木高明らが「東亜半月弧」と名づけた長江流域の雲南・アッサム地方と見られているが、これが最初に日本に伝来したのは今からおよそ二四〇〇年前にさかのぼるとされている。当初は陸稲または陸稲と水稲の未分化の段階のものであったと言われているが、間もなく中心となったのは水稲だった。西日本の照葉樹林帯にまず定着したとされる水稲栽培は、その後急速に東進して、日本列島の歴史は縄文時代から弥生時代に移行する。

だが、日本列島に渡来した米作を中心とする農耕文化は、森林文化を※1駆逐してそれに入れ替わったのではない。それは、一つには日本で始められた水稲栽培が、主として山麓につくられた田圃に溪流の水を引き込む「棚田」から発達し、大規模な山林の※2伐開を引き起こさなかったことによる。A、乾燥地帯の農業ではつねに穀物栽培とセツトをなして広まった牧畜を、稲作はともなわなかった。そのため、放牧のための広大な森林の伐開も行われなかったのである。

こうして、日本列島への米作の渡来は、伝統的な(1)雑木林の消滅を起こさなかった。それだけでない。雑木林にはその下草を「※3緑肥」として水田に供給するという、新たな重要な役割が加わった。日本列島への農耕文化の進出は、在来の森林文化の駆逐ではなく、それとの融合という形で進められたのである。それは、雑木林と並ぶ森林文化の遺産とも言うべき焼畑の営みが、戦後の昭和二〇年代まで全国各地で続けられていたことが物語っている。

こうした(1)森林文化と農耕文化の融合は、里山一帯に、より多様な環境構造をつくり出した。焼畑と雑木林の世界に水田、畑、桑畑さらに水路や溜め池などが加わったのである。このことは、集落の周辺(2)一帯に

本来の自然にはない※4生物相をつくるものになった。森林性の種類に加えて草原性、湿原性、水性などの種類が定着するようになったからだ。人がつくった生物多様性と言っている。

古くから日本人の心に馴染んでいる「花鳥風月」の語は、自然と人の営みが四季の(3)推移とともに織りなす田園の情景を表わす言葉である。中緯度の季節風地帯に位置する日本列島は、鮮明な四季を持つている。B、それをもたらすのは「風月」すなわち気候の周期だけではない。さらに大きな要素は、「花鳥」すなわち動植物と人の季節ごとの営みである。

古くから詩歌に登場する動植物は、じつに多彩である。だがそれらは、たとえば鳥をとってみても、ウグイス、ヒバリ、クイナ、ガンなど、どれも田園地帯にごく普通に見られてきたものばかりである。C、それには森林、草原、湿原、沼などに棲むものが含まれている。

このことは、遠い万葉の昔から日本人の精神的風土の基盤をなしてきたといっている花鳥風月の世界が、森林文化と農耕文化の融合した、共生圏の豊かさがもたらしたものであることを示しているといってもよいだろう。しかも、それは遠い昔のことではない。昭和初期に生まれた私などの子ども時代にも、まだ日本中に見られた世界だった。

里山一帯にこのような環境構造と生物相の多様性を生み出した根底にあったのは、縄文時代からの伝統として受け継がれた、森林文化特有の自然への順応の精神だった。自然を大きく変えることなく、地域と場所の特性に合わせた集約的な土地利用の上に、農耕文化と森林文化の融合が成り立っていたのである。

(石城謙吉「森林と人間―ある都市近郊林の物語」による。)

※1 駆逐Ⅱ追い払うこと。

※2 伐開Ⅱ木を切り、土地を開拓すること。

※3 緑肥Ⅱ草木の葉や茎を栄養とする肥料。

※4 生物相Ⅱ一定の場所・地域に生息する生物の全種類。

問1 文章中の(1)～(3)の傍線部の漢字の読みがなを、それぞれひらがなで書きなさい。

問2 文章中の A C に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア A しかし B だから C ただし
イ A また B だが C しかも
ウ A さらに B しかも C つまり
エ A つまり B すると C さらに

問3 ^① 森林文化と農耕文化の融合とあるが、稲作が日本に伝わったことで、なぜ融合が起きたのか。その理由を二つ、それぞれⅠ、Ⅱの解答欄に二十字以上、二十五字以内で書きなさい。(句読点を含む。)

問4 ^② 花鳥風月とあるが、ア花鳥、イ風月についてそれぞれ同じ内容を述べている部分をアは十三字、イは五字で抜き出しなさい。

問5 この文章の内容に合っているものとして、最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 日本列島で森林が消滅しなかったのは、自然をきちんと整備し管理したからである。

イ 日本列島の生物相は、稲作によってもとの自然にはない多様なものに変化した。

ウ 日本の多様な環境がつけられた原因は、花鳥風月に代表される自然の豊かさのみにある。

エ 場所の特性に合わせた集約的な土地利用が、日本人の四季に対する考え方を変えた。

【五】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たち一人一人の一生、一人一人の存在は、現実の社会関係のなかで、家族関係のなかで、さまざまに条件づけられ、決定されている。自分の生まれた国、生まれた社会、生まれた時代、生まれた境遇、等々によって、私たちはそれぞれ、自分の意志や意向とかわりなく、一定の過去を背負っている。また、その延長上におのおの自分の歩いてきた道がある。そこには、ひとそれぞれの※1退つ引きひきならない生がある。

(第一段落)

たとえ自分から見て他人の置かれている立場がどんなに羨ましくとも、また逆に、他人の不幸な境遇にどんなに同情しても、私たちは個人として他人とすっきり入れかわることはできない。他人の立場に身をおくということは、私たち人間の相互理解のために大切な行為であり、人間の重要な特性の一つである。けれどもそれは、一定の限度のなかで可能であるにすぎない。※2ひつきひつきよう自分は自分でしかありえない。自分は

自分だけで成り立っているのではなく、他人たちとの関係性のうちに成り立っているにしても、それでも自分は自分でしかありえないのだ。

(第二段落)

こうして、私たちの一人一人にとって、自分の一生とは、まず、ほかには成り替われない一生ということになる。しかし、だからといって、それはなにもかもすべてが決定されていて、自由な選択がまったくできないということではない。これまでの過去については、また条件づけとしては、動かすことができないにしても、いいかえれば、それぞれに固有の過去を背負い、幾重にも条件づけられてはいても、その上でなお多くの可能性や選択の余地が残されている。また、たとえ一人一人の背負っている過去は動かせないとはいっても、それは事実としてのことにはすぎない。一人一人がその過去を、過去の諸事実を、どのような意味をもったものにするかは、現在の、またこれからの問題である。さらに、今後の可能性ということになれば、生きていくそのときどきの各人の道の選び方や決断、それに意志的な努力によつて大きくかわりうるのである。

(第三段落)

いま、各人の道の選び方や決断といったが、それはなにも、右すべきか左すべきかというような、はっきりした人生の重大な岐路に立っている選択や決断のようなものばかりではない。選択や決断は、もつと目立たないかたちで私たちの日常的な生活のなかでも求められることである。テレビのチャンネルを選ぶことだつて選択であり、テレビを見ていていつ立とうかと思うのだつて決断である。選択し、決断することは、私たちが⁽²⁾惰性に流されるのではなく、自覚的に生きようとするれば、いつでも⁽²⁾伴ってくる。だからそれは、毎日毎日の生活のなかでたえず新鮮なものを見出すこと、またそういうあり方を積み重ねていくことにも結びつくのである。一人一人が職業のうちにせよ、社会的な活動のうちに

せよ、趣味のうちにせよ、自分の歩む道を見出すことができれば、各人それぞれの一生は、⁽¹⁾いつそう自分のものになる。そして、選択も決断も意志的努力も、思い、考えることなしにはありえないわけだ。

(第四段落)

私たちは、生きることを離れてはよく思い、考えることはできず、また、思い、考えることを離れてはよく生きることができない。しかしそうはいつても、私たちは生きていくなかでいつでも同じように思い、考えるのではない。とくにわが身をふりかえったり自分のことを考えたりするときと、それほど自分を意識せず、かえりみずに生きているときがある。では、どういうときに私たちはとくに自分のことをかえりみ、自覚的にものを考えるようになるのか。それはいままで⁽⁴⁾自明なもの、不動なもの、確実なものとしておよそ疑うことのなかつた自分の考えの前提や基盤が揺らいでみえてきたり、さまざまなつまずきに会ったりして、私たちの生がなにほどかにせよ動揺にさらされたときであろう。人の一生でいえば年齢の変わり目、時代でいえば転換期には自分と環境との関係が不安定になるので、とくにそのような状態になりやすいわけだ。私たちが環境との安定した関係のうちにあるとき、また社会の支配的な価値観を信じ、そのうちに生きがいを見出しているとき、ほとんど自分をかえりみないですむ。

(第五段落)

ところが、これまで不動なものと思つていた社会の支配的な価値観が揺らいだり、あるいは私たちがその価値基準の支配するところに生きがいや意味を見出しえなくなったりするときがある。その場合私たちは、どうしても自分をかえりみざるをえない。そして、なんとかして考え方や生き方の確実な基礎を見出そうとすることになるだろう。このように考え方や生き方の確実な基礎を見出そうとするとき、当然私たちは、こ

れまで自明なもの、不動なもの、确实なものどされてきたあれこれをあらためて問いなおし、疑うようになる。それは批判のための批判でもなければ、※5 懐疑のための懐疑でもない。あくまでそれは、确实な基礎を求めて私たちが現実のなかで積極的に考え、充実感をもって生きていくためのものである。

(第六段落)

(中村雄二郎「哲学の現在―生きることを考えること―」より)

※1 自分ではどうすることもできない。 ※2 つまり。

※3 なかなかやめられない習慣。

※4 説明をするまでもなく明らかな。 ※5 疑いをもつこと。

問1 文章中の(1)～(2)の傍線部の漢字の読みがなを、それぞれひらがなで書きなさい。

問2 第四段落の「流される」の「れる」と同じ意味・用法のものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 進学で、地元から離れる。

イ 自然と故郷が思い出される。

ウ 姉が弟に頼られる。

エ やり遂げられる強い意志を持って。

オ 卒業式で、校長先生がお話をされる。

問3 次の文章は、第一段落から第三段落までの内容をまとめたものである。

A、Bにあてはまる最も適当な言葉を、第一段

落から第三段落の中でAは十三字、Bは十二字でそのまま書き抜きなさい。

私たちの一生や存在は社会や家族との関係のなかで条件づけられ、決定されている。他人の立場に身をおくことは相互理解のために大切なことだが、それは一定の限度のなかでできることであって、動かせない過去を持つ限り、A。それゆえ、自分の一生とはほかには成り替われない一生ということになる。しかし、それはすべてが決定され、自由な選択ができないということではない。動かせない過去とさまざまな条件があるにしても、Bはある。また、過去の出来事をどのようの意味づけるかは、人それぞれの今後と大きくかわっている。さらにいえば、現実のなかで積極的に考え、充実感をもって生きていくための确实な基礎を求め、社会の価値観や価値基準を問いなおし、疑うようになるということになる。

問4 ① いっそう自分のものになるとあるが、それはなぜか。最も適切

なもの、次のア～オの中から選び、記号で書きなさい。

ア 社会や家族との関係ばかりを自覚していた生に、自分の過去に縛られる職業や趣味が加わるから。

イ 互に分かり合うことを最も大切にしてきた生に、自覚的な判断による友人の選択が加わるから。

ウ 自由な選択ができず個性がなかった生に、自覚的な生き方によって初めて自分の個性が加わるから。

エ 変えられない過去に縛られると自覚していた生に、自分の人生を左右する重大な決断が加わるから。

オ 国や社会、時代などにより決定された生に、日々新鮮なものを見出す自覚的な生き方が加わるから。

問5 第六段落は、第五段落に対してどのような関係にあるか。最も適

切なものを、次のア～オの中から選び、記号を書きなさい。

ア 第五段落の内容に即して、さらに具体例を補足している。

イ 第五段落の内容に対して、根拠をあげ反論している。

ウ 第五段落の内容を離れて、新たな話題を提示している。

エ 第五段落の内容を受けて、さらに論を展開している。

オ 第五段落の内容に関して、新たな視点を示し比較している。

六 作文

あなたにとって、「よいあいさつ」とはどのようなことですか。これまでの生活の中で感じたことや経験を踏まえて、一六〇字以上二〇〇字以内で書きなさい。